

種の悲哀を現はしてゐた。さうすると西の方から一人の大人が商賣物の大風呂敷を背に負つて、トポトポと向うの暗の中から出て来たが、いかにも元氣なく其場にぐずれ伏しはしないかと思はれた。そこへ先程の子供が走つて来て「御父ちゃんお歸り。」と云つて父の足下によつて見上げてゐたが、すぐふりかへつて家に飛びこみ後から父が入つた。

夏の夜の一風景は此で終つた。そして再び僕は僕の務めについて北に向つた。そして唯其ままに先の事をすぐせなかつた。僕は筆にその子の聲や、又デリゲートな姿勢を現すことが出来ないのが悲しい。

僕は思ふ。あの子供の唯一言「お父さん、御歸り。」と言つた言葉、唯それだけであると言へばそれだけであるが、何の考もなく自然と喉を突いて出た言葉の力の偉大さを考へずには居られない。其言葉を出した時の其子の心情は全く絶對界に於けるものであり、一點の邪念もない神の状態である。子供の純な心の産物は、將に神の産物である。そして其言葉を受けた父なる人の勞苦も心勞も一掃の下に飛散したに違ひない。且また實際さうであつた。父の足取りは急に元氣付いた。お偉大なるかな純なる心よ。唯一言にして終日の勞苦を忘れしむ。今や吾々の純眞さも跡もなく消失して虚榮に満ち

此の老ひぼれたD形の機關車には重過ぎる無数の貨物車が續いて、後部の車に附けた赤燈が淡く光つてゐる。助手のYと一廻り機關車を試らべて見た。丁度飛行家が飛ぶ前に一通り飛行機を見て廻らねば、不安でならない様だ。

午後十一時×分——いよ／＼出發だ。氣笛は山から山へ響いて、どことなく不安氣な夜だつた。

二・三米動ひたかと思ふと、いきなり不吉の前兆のやうに空轉を五六回續けた。レールに雨がぬれてゐるからだ。だがすぐ平常に歸つた機關車は、さも苦し氣に驛を出て行つた。次の驛までは相當間があつた。其の上峠や川やトンネルが續いてゐる難所なのだ。あだかも霧の中を走る船の様に、僕等は何に頼つて良いのか分らないくらい不安なコースなのだ。町や驛の燈が見へなくなると、果して僕等は二度と人里に歸れるのだろうか、此のまゝ闇の中へ吸ひ込まれるのではないのだろうかとも思へた。

顔を出すと、目鏡にピシヤ／＼雨があたり。唯前方はヘッドライトに青く光つてゐる二條のレールと、山や岡の半腹がシルウエトを畫いて闇と境をなしてゐる。ゴー　ゴーと　トンネルや鐵橋を過ぎる。Yがボイラーを開けて石炭を投げ入れた、と赤い／＼焰が、Yの顔を恐ろしく見せた。

て身を亡さうとしてゐる。又現今の社會は社會的純眞なる物即ち共に生きる精神は毫もなく利己と虚榮とに満ちて國を危くせんとする者さへある。

汝純眞なる子よ永遠に純眞たれ、永遠に純眞なる者は神なればなり。此所にその永遠なる事を祈る。

諸君共に純眞にかへれ、あらゆる邪惡は一掃されん。(終)

文明の裏面

松宮 梯次

これは僕がよく新聞で見る自動車と列車の衝突悲惨事について、機關手に同情と理解を持ち、自分が機關手に成りすぎして書いて、見たものですから、或は専門家から見れば出鱈目な所があるかも知りません。

××驛のシグナリがボンヤリと雨にぬれてゐる。最後の旅客列車の出で終つた後の驛はヒツソリとしてゐる。そして此の驛の終列車として僕の貨物列車が出て行かねばならない。

列車が今や、一人居ない夜の山中を走つてゐるのだと思ふと、僕等は或る恐怖を感じずには居られなかつた。と言つて汗と油の中に生活する僕等の恐怖は、お化けだの幽霊だと言ふ怪談めいた事ではないのだ。

僕等の一番恐ろしい物は、常に文明に對して或る反抗を續けてゐる言ふに言はれぬ無形のグロテスクな存在物なのだ。一例を擧ぐれば、今までたしかに動いてゐた時計がピタリと止つた、だがゼンマイが解けたか、油が無くなつたのだと思へば少しも不可思議ではない。だが十二・三秒ジート時計を見てゐると、又コチ／＼と自然に動き出した。實際良くあることで、一度止つた時計が自然に動き出す——と言ふ現象の裏に、どんなに強情な人間でも、神秘的な或る物の存在を考へずには居られないはずだ。

其の様に、多くさんのハンドルも、精巧な機械も、信賴するメーターも、そして精密な計算で出来上つた此の機關車も二人きりの闇の世界で命令通り動いてくれるだらうかと言ふ事だつた。

さう思ふ時、どことなく列車の進行が遅い。此れでも走つてゐるのだろうかと思ふ程おそい。メーターは定速力を指してゐるし、ピストンやクランクは力強い音を立て、相當動いて

ゐるのに、やはり二十世期の文明でも勝つ事の出来ぬグロテスクな無形の悪魔が、機械と言ふ機械をやがてくるはして終ふのだと思はずには居られない。さう思ふと早く人里に達したい。早く人々に接したい。文明の中に飛び込みたい……：言ふ氣持ちで一杯だつた。

それには鋼鐵の固いの僕等の列車が、金屬性の響を轟々と立てながら、どんな障害物でも突飛ばして、全速力で進んでゐてさへくれれば安心出来るのだ。

もう僕は我慢出来なくなつた。唯頼りにする機關車が速く軽く、悪魔の寄り附かぬ様にする爲に全速力を出して終つた。今は綱を切つた荒馬の様に、僕等の列車は法則も何もかも無視して、ハイスピードで闇の山々を縫つて行つた。今にもレールから外れて終ひさうだつたが、モルヒネ患者が無我夢中で針を体内につきさすのと變りない心理状態だつた。

此の氣持ち良い快速力の動搖にゆられながら、もしかしたら完全に僕等の機械が文明に反對する悪魔に勝つてゐるのだ——と思つてゐた時強いショックが前方でした、と同時に異様な人の叫び聲と、自動車の一部分らしい破片がガチャンとガラスを破つて、炭水車の石炭の山に突きさゝつてゐた。

其の瞬間、僕の頭を一秒間の何分の一とも言へぬ速さで、

と言ふ風にミリタリズムに入ると一夜ぐらい話し明す。

其上、福永恭助や池崎忠孝等のミリタリストが「潜水艦の話」「米國怖るにたらず」等の本を出して吾々の愛國心をそる。又科學畫報等の誌上に「デーゼルエンジンの飛行機化」だの「吾が重機關銃の威力」何んて言ふのが出ると、つい讀みたくなつて、益々自國の武器——悪く言へば人殺しの機械——の發達にある嬉しさと、そして變な優越感を感じる。

又、良く學校から見せてくれる無味な戦闘映畫も、波頭を蹴つて進む軍艦や空中戦と血がおどる、そして癡たり立つたりする戦闘教練になると空砲一バツに殺氣立つ、だから吾々にはミリタリズムの血潮が多分に流れてゐるのだ。だが、未だ無邪氣なのかも知れない。

此の情緒は外國の小供にも流れてゐるに違ひない。

丁度近江の人が琵琶湖を自慢し、安藝の人が宮島を譽める様に、イギリスの青年は世界一の戦艦ネルソンやロードネルを譽り、アメリカの青年は自國の空軍や毒ガスを、ドイツではツェペリンや科學兵器、ドイツ魂を自慢してゐるだらう。

そして其の國民の愛國心の燃へてゐる間、其れがミリタリズムに變り、其のミリタリズムが高まると殺氣立つて來て、世界大戰の二の舞をやり出すかも知れない。だからミリタリズム

「やつて終つたな！」と言ふ感がひらめいたが、又他方には「人里に着いた」と言ふ嬉しさと障害物を蹴り上げた機械力の偉大さに、或る陶醉と誇らしさとを同時に感ぜずには居られなかつた。

ミリタリズム

松宮 悌次

吾々の愛國心が燃へてゐる間ミリタリズムは消へない。だから元氣な學生が集まるとミリタリズムに花が咲く。

「日本のイ號潜水艦が、太平洋の大海中を往復したそうです」とAが言ふと、

「それより古鷹のいかにも速さうな波打つた甲板を御覽なさい、公表速度は三十三ノットですが、大丈夫、四十ノットは出るさうです。」

なんてBが眞面目に言ふ、するとCが「日本のタンクを見なさい、二衝程エンジンを使つて、其上完全に消音されてゐるのは日本だけです。」

ムから生れた愛國心は過激な物に違ひない。

もし僕一人の理想——空想に近い——を言へば、吾々のミリタリズムが自國のみの尙武心から轉じて、全世界の人類の平和の爲のミリタリズムでありたい。そして其れから構成せられる血生まぐさい武器は、蓄音機や電話、ラヂオ等の如く世界文明の爲の武器たらしめたいものだ。

山寺生活の一日

北川 東海 林郎

靜かに陽は彼方の谷間に落ちて行く。

黄昏は杉木立の間より魔の様な手を次第に擴めて行く、無氣味な沈黙が次第に擴がつて、さしもやかましかつた蟬が徐々に聲を低めて行く。鳥も今は塙に歸つたと見えて聲もしない。此の山にも直ぐ夜が訪れるのだ。

黄昏は其の色を濃く染めて行つた。

陽は僅に天を摩する杉の梢に威光を輝がして居た。聶々と閉ぢこめて來る闇に美しい自然の森羅萬象は惜し氣もなく姿

を消して行く。身にせまる淋しさを足にこめて、石をけとばすともう見えない谷間にがさ／＼と氣味悪い音を立てる折柄此の自然の沈黙を破つて「ゴーン」お、鐘が鳴る。暮の鐘がなる。遙か彼方の山に木魂して、淡い哀愁をそよる韻律が深い想をこめて静かな空間を振動させて居る。陽は全く落ちた。一つ、二つ、と數へる己が聲に怯へた様に、堂門に飛び込んだ。取乱した荷物を前に薄暗い蠟燭が自己の姿を長く堂の疊に影をうつしてゐる。小さく燃え上る焔に吾身を焦す名も知らぬ虫が羽音高く飛び込む。と、可弱い焔は黒い影に動搖を與へてゆらめく。無言の儘荷を片付け始めた。時間はと見る眼に短針が八時を示す。

身体が何となくだるい。明日が早いのだからと借りた蒲團を敷く。あふり風で又灯が惜しそうに瞬くむつとする微臭い胸を鼻で押へて、じめつく蒲團に身を横たへた。彼方の暗の中から同宿の坊さんの軽い寢息が聞えて来る。夜は更ける。闇は深まる。冷氣と靜寂が身と心とを引き離さうとするのをやつと蒲團に踏みこたへて、けらの生命の様な可弱い灯火をふつと吹き消す。一縷の綱を絶たれた様な物淋しさを感じながら何となくだるい眼をふせた。……數分！やがて一寸先も見えぬ闇に得休の知れぬ偶像が作られた。戦く魂を嘲笑ひ

えて行つた夢を追つて魂は再び夢幻の國に遊び、漸くまどろんだ。遠くなつた様な耳に再び鐘の音が響く、ハツと眼を覺すと向ふの御堂で坊さんの讀經の聲が夢の國の音楽の様に幻の國に再び引き込む様に木魚の音に雜つて冷たい空氣も流れ

て来る。
アツと伸びをして足を突張るとニュツと蒲團の外に突出る。ぞつとする寒さに思はず身を縮めて蒲團を引くと嫌な嗅が鼻を打つ。「おい起きよう」パツと跳ね起る足にまよふ蒲團が宙に躍る。齒に沁む冷水を覺に受けて、清淨な朗かな空氣を胸一杯吸込みながら顔を洗ひ終つた。時計はと見ると五時である。朝飯に遅れてはと片足に下駄引きかけて見上げる曙の空に紫雲が漂ふ。颯と吹く曉風に首を縮めると木々がサザツと哄笑した。何！と意氣込んでかける足に何の咎もない小石が下駄に飛されて遙の谷に落ち込む。坂をとんとん歩、歩を移せば、身体は惰性で前にのめる。倒れるのを辛じて防いで次の一步を踏み出す共に足は走るのである。上より轉る石と共にまっしぐらに馳せて、此の世をさらばとお暇する小石にハツと全力を右の下駄に加へて、谷を前より右に移した。やうやく本坊に達してやれ／＼と見上げる坂は茂る木立に隠されてゐる。厨を通ると出合頭に満面笑の坊さんに會ふ。「お

ながらそれは、みじくも破壊されて行く。しばしの後再び作られて又破壊されて行く。闇が否靜寂が官能外の何物かを動作せしめるらしい。眼が冴えて來た。神經が興奮して來た。横の炊事場の寛の水音を耳にとらへながら、疲れた眼は見えぬ闇を通して天井の一部をかつと見据へた。

山嵐が谷超へる木々の高き音が時々水音を消して空氣に傳へた。走馬燈の疾走するが如く今日の出來事が頭に巡る。

深々と更け渡る山寺の一室に、闇の中で友の寢返りする音を聞きながら同じく轉々反側して居たのである。何か物の怪にでも襲はれた様に心臓が時ならぬ響を立て、打ち出した。耳に傳はる音を恐れて押へる手に、血潮の衝動が傳はる、時計を引き寄せセコンドの響を胸打つ波の數を、數へ合す中に音は次第に遠ざかつて行つた。今迄高く聞えて居た寛の水音も共に遠のいて行つた。やがて淡い夢路をたどつたのである。

× ×

「ゴーン。」「ゴーン。」淡い夢を破つて長く餘韻を山彦にひびかせながら曉の鐘が鳴る。呼起された魂はやうやく冷えた身体を起した。しつとり潤つた空氣が嫌に膚にさはる。硝子越しに見える僅かの限られた空は薄く未明の色を漂はしてゐる。何気なく考へながら見つめる眼は次第に閉られて淡く消

早う」と頭を下げる。丁度其時曉雲破つて朝日が顔を出す。

「はつ！お早う御座います！」と一禮して見上げる坊さんの頭に太陽ならぬ太陽のまぶい光線が眼を射る。

ハツと眼を伏せて笑虫をじつと腹に押へ付けて再び南無大慈大悲觀世音菩薩と慈悲光を仰いだ。膳を出して板間に坐る。板木が喝々と音を立て、寺院に響く。法衣をまくつて坊さん連はしきりと腕を口に運ぶ。黒い麥飯は町の者はよう食ふまゝいと嘲ける様な坊さんを驚かして空腹に十二時迄七時間の兵糧をつみ込んだ。一日遅れの町の新聞を眺める。人里離れた山寺生活の淋しさが未だ馴れやらぬ心にひびく。

「町は暑いでしょうな。」一人の坊さんは如何にも此處は涼しいと云ふ様に誰に云ふともなく獨白した、六時頃に和尚禮讃の鐘が鳴る。坊主頭と野郎頭を交錯させて和尚の前に並ぶ、三拜して聲高々と、大徳存念我今唱白と唱へるのである。七時頃又鐘と共に和尚の經文の講義が始まる。先づ三拜の後、我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身語意之所生、一切我今皆懺悔と懺悔し三歸三竟十善戒と反復して唱へる。最後に意味は判らないけれど、フン、ボーヂ。シツタ。ボダハダヤミフンサンマヤ。サトバン。と唱へ得休の知れぬ木を叩く音と共に和尚の講義が始まるのである。

「八不諸戯を絶つとは……エヘン……」

「宗教とは一種の哲學である……」「近頃の若い人は兎角坊主と云つて……」等の隻句を耳にはさみながら傾聴する。八時頃漸く説教は終つた。開放された様に外に飛び出して翠るばかりの緑の木蔭に朝のなつかしい様なしつとりとした雰圍氣に身を沈めながら、たゞすむと、ひやりと露が木葉洩れて首元に落ち込んだ。岩間より水晶の様な露が滴り落ちて小さな流れを作つて居る。チヨロ／＼と可弱く流れる清冽をじつと見つめて居ると眞紅の美しい蟹が不審氣に白い鉄を立て、傍の石の下から這ひ出して来る。朝露にうるほつた赭い土を踏みしめて歩を移すと、くつきりと二の字が描き出される。深呼吸と兩手を杉木立洩る、蒼空に伸ばせば、枝から枝に細くかゝる、青い嫌な色をした蜘蛛を驚かして糸がべつたりと手にまとひついた。軽く坂を登つて行くと木葉を別けて日光が土に丸くうつる。尖る岩をぐつと踏みしめて身体をすつと伸ばすと、今迄同じ高さであつた樅木の上に頭が出る。日陰に咲く羊齒類の濃い緑を横に亭々たる喬木を縫ふて、定められた住家二階堂に二丁の坂路をよぎる。部屋に一先づ身を休めて掃除に取かゝつた。

讀書は涼しい間にと、手當の本を小脇にかゝへて、二階堂

とおゝ、大きな蟻が!! ハツと立ち上つて下駄を上にな下に大地にくぎ付けた。蟻も驚いたかきり／＼舞して、大地にひらりと飛び降りて一目散に逃げ出した。やれ／＼と轟く胸を腹に撫で下し凝つと地面を腫めた。夏は自然の活躍時である。

蟻も自然物である。その營々として努力する様を見よ!! 如何にも急がしげに枯葉散敷く地面を右往左往して俄を求めて居る。ふと眼を横に移すと嗟! 其處には彼のダーウィンの示した自然淘汰は惨めな姿として表はされて居た。赤い蟻と黒い蟻は必死となつて噛み合ひを續けて居た。如何に生きる爲めとは云へそれは餘りにみじめな姿ではないか!

やがて黒蟻は赤蟻を征服したと見え、引きづつて行く。ホツと息を逃がして眼を又他に移すと其處には又無慙の出來事があつた。砂にまみれながら長い身をのたくつて最後の奮闘を續ける蚯蚓、それを取り圍んで攻立てる蟻。

其の昔、印度大自然に育まれたる迦毘羅王國の太子悉達多釋迦として此の世のみにくい、餓鬼畜生阿修羅の巷に彷徨ふ人類を永劫不滅の安樂境に救ひ出すべく、出家遁世の志を此の争闘を眺めて、固く誓つたと云ふ實に悲惨な有様である。神經的な氣分になつて専修庵に暇を告げた。日暮しがやかましく啼く。そつと梅が枝に立ち寄つて掌に一匹捕へた。ジイ

を出ると、堂前の猫の額程の平地に例の坊さんが、氣を利か

してか百燭光にまぶしからうと、カン／＼帽をすべらぬ様に手拭と共に頭にのせて、炎熱の太陽を限りなく浴びながら、地に蒸し返へる反射熱を汗に止めて、せつせと草取りに餘念がない。「お暑いでしょう!」と横をすり抜けて少し上手の専修庵に登る。百年は経たであらう。うねり曲つた老松に青く苔蒸して、蘿蔓が一面に被つてゐる。其の針葉に濃緑翠る間より鬱蒼たる潤葉樹の谷を越えて、遙に渺々たる眺望が展開して居る。大阪平野と云ふのが大淀川を幹として連枝の如き脈流が青田に白く横はる白路と交錯して一眸の裡に擴がる。

碧たる蒼空に僅かの紫色を保つ金剛生駒連山、其の背後に夢の如くせまるは笠置山脈であらう。手の下に見える茨木の町に近く白く光つて横はる。蜿蜒長蛇の如き淀川は此等の山を遠く追ひのけて渺茫たる平野に悠然と流れて居る。名も數へ切れぬ木々の葉を颯と驚かして冷風が無妙の快感を頬に残して過ぎて行く。茅葺きの専修庵の縁側に腰を下して書物を擴げた。

固い活字の上を何の興味もなく二三行走つた眼は再び前面の眺望を想像の世界に晴やかに踊る魂にしつかと捕へて、倦かずに凝望して居た。と足の甲が妙にむづかゆい。ふと見る

ジイとなくのを眺めながら蒼穹を仰いで見た。慈みあふれる無碍光は限りなき喜びを秘めて満ち／＼て居る。十誠の一、不殺生と想出して指を放すと緑の木蔭に蟬は飛び去つた。黙々として足元を腫めながら丈六の金佛の所に急ぐ。粗末な不揃ひの細い石段を數へ終つて大佛の前に出た。見上げる丈六の露座の大佛は、默念と坐禪を組んでゐる。耳にも鼻の穴にも蜘蛛に巣を張られ、春夏秋冬の風雨に吹き曝されて此の大佛は何を考へて居るのやら。それにしても、あゝ偉大なる宗教の力より彼は是の如き丈六の佛を彼の小徑より運んだのである。其の當時の追想の繪巻物を華かに色彩つて頭の中に繰り擴げながら傍の捨石に腰を下した。太陽の少しも當らない、茂樹の此處は赭土の見えぬ迄徹つて居る落葉が濕つて、嫌な臭がする。五分もある様な美しい色をした山蟻に驚きながら歩を諸所に移して見た。蕭颯たる風の訪れに喜ぶ木々に蟬は高く歡聲を擧げてゐた。少し下手の平地に並ぶ墓は黒い迄に苔蒸して薄暗い木蔭に陰凄な氣が漂ふ。夜なれば燐の青く燃えて吹く生暖い風に骨をがた／＼鳴らしながら、無数の骸骨が墓を巡つて舞踊して居たかも知れぬと氣味悪く考へながら、とある風雪に字の判らぬ墓前にイづんで軽く頭を下げると、前なる可憐な白い花が折柄の風に泪の露をハラ／＼とこぼし

た。餘りな可憐さにかうした環境が作るのか小さな水珠を眼に湛へて沾ふ土に膝ついてそつと花瓣を唇に押當てた。是して全く自然化してしまつた様に、無念無想と云ふか、無我の境と云ふか何の記憶にもない數刻を此處に送つたのである。しつとり露つた上衣を肩に再び石階を溽暑の日光を溶しつゝ、心を後の石に引き離して身を前に進めた。二階堂に晝食迄の時間を横臥して待つた。「御免下さい」誰か訪れる聲と共に立上つて玄關に出て行く例の百燭光、來客かしらと起上る耳に「ハハ……」と高く響く小僧の聲、と見ると坊さん手を肩に本堂の方に逃げる米櫃抱へた小僧を追ふて行く。

山寺の平和な無邪氣な惡戯と微笑みながら同じく立ち上つた。「しよがない奴や！」つぶやきながら坊さん百燭光を振り立てながら片頬をくづす。小坊主は腹をかゝえて眼を白黒さして居る自分も釣込まれて笑みと哄笑の渦中に溺れた。櫃の中には白飯がつめられてゐる。佛前に供へるさうな。扉を開いて本坊と宗の異ふ淨土宗だと云ふ佛の前に坐して小僧は殊勝にも鐘を叩く。本坊に聞えれば宜いと云ふのを、やけに大きく叩く。そして念佛は口の中で屁と極め込んで横むいてニヤリと笑ふ。暫くすると木魚をボク／＼叩いて鐘をゴーン。そして濟まして立ち上る。供物は？と聞くと、とん／＼と櫃

探る様に水音に誘はれて蔭を離れた。春晩い山は今梅の實が漸く熟せんとしてゐた。濃緑の影に微笑む黄色い實を傍の竹折取つて叩き落す、バラ／＼と落ちるのを素速く拾ひ取つて口に入れる。酸いけれど美味い、胸にゴクリと唾液が流れ込む青くて固いのは向ふに見える猪の出ると寺男の話した竹籤目掛けて投げ捨てた。

バサ／＼と竹の葉はゆれる。潺々と流れる清冽に山肌も露に穿たれた溪間は珠と散りて岩に激し、或は泓停に碧をたゞへ水の美の極致を示して居た。高さ百尺と云ふ箕面の瀧の源水は澄み切つて居た。岩を踊躍した水が僅かに漣漪を立て、居る泓みに果敢い泡沫として消えて行くのを眺めつゝ、そつと掬み取つて口を漱いだ。甘露のとけるのを舌先で味はひながら、そつとすかして真砂の粒を數へると小さい山椒魚が私は砂ぢやないよと小さい足と可織い尾を動かしてつツと走る美しい石だを見ると白い缺を高く擧げて紅い蟹が何か獲物でも見付けた様に横に動く。小石をそつと動かすと豆程の可愛いい蟹が五六匹よち／＼驅けだす。冷い水に軽く足を浸しながら周囲を眺めて見た。山は長閑だ！平和だ！

うつとりと空を見上げた。夏の日は長い。少し下手に河鹿の鳴く聲が高く響いて來る。

を叩いてニヤリ。成程供へてないのだ。持つて來ただけ。どうせ鳥の口に這入るのだからと、平氣な顔もして居る。山は長閑、寺は静か、そして佛に事へる彼等は暢氣なものだと思はず頬をくづした。山の七時間の麥飯腹は少し保ちにくい。ゴクリと生唾をやつとの事で胸先で支へる。凝つと耳をすますと、微に聞えるのは確かに山鹿流の三段流れの陣太鼓ではない、待ちに待つた橋木の音三下りと三つは集合橋だ。餓鬼の様だけれど此の腹ではと一目散に本坊に馳せた。

咽喉迄つかへてゐる麥飯を、づ／＼なく撫でながらとある綠蔭に身を憩うた。歩くのが辛いのである。暫く無心に未だ歌忘れぬ老鶯の音に親しんだ。カー／＼と異様の羽搏きと共に三羽の鳥が飛んで行く。本坊で白飯でも食ふのだらう。山は平和だ。ジリ／＼燒き付く様な日光も紫外線を多く含む爲か、柔い穏かな光を投げてゐる。本坊に霞の様に紫の煙がゆらゆらと立ち昇る。參拜者の静い夏は寺は何時も眠つて居る様。裏の林でがさ／＼と時ならぬ音を立てる、振り向く顔に寺男の爺さんが赭黒い頭の護摩鹽を鉢巻で無雜作に繰り上げ柴を持つて「暑がすなあー」と前を過ぎる。折節途絶える蟬聲に微になつかしい様な潺湲の響が聞える。沙漠に渴した駱駝が綠樹の蔭に湧く泉を求めて炎熱の下に、オアシスの匂を

渚

—一九三二・八・二〇—

漁師が役立たぬを歎いて捨てたのであらう。渚に壞れかゝつた小舟が横たわつてゐた。もうその小舟は漁師に奉公する力を失つて捨てられたのであらう、私はその小舟を見ると理もなく淋しい氣持に覆はれそして胸の痛くなるのを感じた。渚に捨てられたその小舟——それを見ると何故私は淋しく悲しくなるのであらう、何故か私には判らない。私は磁石にでも引きつけられる様にその小舟に近づいた、その渚に寄せては返す浪の音は小舟の哀れな運命を慰さめるやうに微かに私の胸に溶け込んだ、と同時に秋風に誘はれて澄切つた空氣の中に流れ行くやうにも思はれた。私は今深い淋しさに覆はれてゐる自分の姿をはつきりと見た、そして又私はその壞れかゝつた小舟が何んだかなつかしいやうに思はれてならなかつた、私は異郷の淋しさに打たれつゝ漂泊の旅を續けて行く青年が弱り果て故郷のなつかしい空を飽かず眺めてゐる時の如き氣持に捕はれて、じつとその小舟を見入つた。そして私は小舟の運命を考へた。小舟を捨てた主は決して小舟を置去りにすることを喜ばなかつたらう、捨つるが爲めに一層切ない

情けなさを味つたらう。

そしてこの小舟に感謝の涙を捧げることが惜しまなかつただらう、再び修繕する事の出来ない小舟を捨てた主は必ず自分の生活の安定の爲に新しい小舟を手にし、この小舟を捨てるに餘儀なくされたに違ひない。感傷的な、もの淋しい秋、落葉してかすかな音を立て力なく地上に散り行く秋、その秋も餘程濃くなつた、今、涯しなきこの渚に捨てられし小舟のみじめな姿——小舟の傍に佇む私——私は小舟の主と小舟そのものについてじつと考へてゐた。再び使用されない小舟、捨てられた淋しい姿の小舟……私は思はず斯う口にした、その時私の耳には渚を打つ浪の音は主なき者の主を探し求める吐息の様にも又すゝり泣きの様にも響いた。嗚呼捨てられし者の悲哀……若しこの小舟に心があるならそれはどんなに嘆き悲しむであらう。捨てられし者がその主を尋ねる苦痛——若しもこの小舟に魂があるなら捨てられた小舟——淋しさを抱くだらう。淋しい秋の渚に捨てられた小舟——淋しさを喜ぶ私はその小舟と離れるのは苦しくなつた。そして私は心の底から私と一緒に居よう何時迄も……私は淋しい者の瞳から湧き出づる涙を拭はずに見てゐる事の出来ない人間だからと叫んだ。

すると小舟は、私は捨てられた悲惨な者です助けて下さい散り初む花と等しき私を援けて下さいと言ふやうに思はれてならなかつた。だが果して私は小舟と共に居る事を許されるだらうか、一緒に——この淋しい者と共に居る喜びが私の胸に宿つたのも一瞬間に過ぎなかつた、その喜びが胸一杯に擴がつたのも少しの間に過ぎなかつた、そうした希みは凡て果敢なく消えて行つた。一時の夢だつた。私は夢なら永遠に覺めずにおて愆しいと願つた。だがやつぱり覺めて空虚なものとなつた。あゝ例へば夢とは云へ共に居ようとした小舟と別れを告げなければならぬ悲しさ——哀れな姿の小舟を連れて行く事の出来ぬ苦痛——それはそうした事に出遇つた者のみを知る苦しみこそどんなに大きいものだらうか。私は小舟と共に居ることを許される喜びを感じた時は幸福者であつたが別れる悲しさを知つた私は獨りぼつちの身であることをづく感じ乍ら渚の彼方を眺めた、私こそ淋しい秋の渚に捨てられた小舟だ、淋しい秋の渚に捨てられた哀れな姿の小舟こそ私自身だ。背に紅い夕陽を浴びた貧しい自分の姿を私は判然とこの渚に見とめた。

今は單調なる抒情詩の夕景では無くなつてゐた。私は強くならうと決心した、そして潔く捨てられた小舟に別れを告げ

た、今一歩——小舟から遠ざかつて行く自分の姿を見出した小舟よ左様なら、と私はこの言葉だけを小舟に與へて背に紅い夕陽を受けて歩み出した。さうだ——秋はほんとに感傷的だ其の淋しい、そして悲哀を歿して逝くのだ、自然の掟に無理に逝くのだ。去らうとする者を止めんとするとは何んと云ふ徒らな努力であらう。

近け——去れ秋よ、秋が逝つても渚ではあの捨てられた小舟を見るだらう、又會はう——假令秋が逝つても残された小舟に會ひ自分の淋しさを慰めにゆかう——こう心に鞭打つて私は渚から離れて行つた。

思ひ出すまゝに

電波の速さは一秒間に三〇〇〇〇〇回地球の周圍を七回半廻る。光も同様である。飛行機が一時間に二百軒走るとしても、電波や光波と競争すればとてもたまたらない。必ず一等賞は彼等の手にある。此の恐るべき速さの光でさへ地球に到達するに何百年か要すと云ふ遠距離に尙星が存在すると聞いては唯自然の偉大なるを驚かざるを得ない。直径三〇〇〇〇〇〇〇〇といふ恐ろしい小さい微粒子即ち電子なるものが活動して宇宙の萬物が構成されると聞いては更に自然の微妙なるを嘆ぜざるを

得ない。實に自然は偉大であり且つ微妙である。併し自然の偉大も自然の微妙も我等人間界に知られてゐる事は皆人間の力により闡明されたのである。ニュートンと言ひアインシュタインと言ひ皆自然の扉を開いて人間界に自然の真相を吐露せんとする自然より以上に微妙な且偉大な人である。かく考へれば恐る可きは人間の力である。實に人間は自然を征服するの能を有するものである。併し又自然の前には人間の無能を歎ぜざるを得ない事がある。秦の始皇帝でさへ「不老不死」はインポシブルであつた。歐洲大陸を暴れ廻つたナポレオンも時の経過と共にセントヘレナの露と消ゆべき時があつた。

平家に非ざる者は人に非ずと奢りを極めた平家一族の一人び源氏の白旗風に靡くや忽ち西海の藻屑となつた。如何に人の力は一時的偉大であつても自然の前には微弱である實に人生は果敢なく自然の永遠なるに比し流轉測り知るべからざるものである。それでは自然と人間とはどちらが偉いだらうか勿論一概には言へない。時には人間の方が偉く時には自然の方が偉い。それでは如何なる時に人間の方が偉く如何なる時に自然の方が偉いか。自然には一定の法則がある。その法則こそは全く萬物平等で如何なるものにも一樣に適用される。而して人間始め如何なるものも此の法則に服従すべきもので

之等を間違なく支配するのが自然の偉いマッ所である。若し人間が此の法則に従つて事をなせば大なる力を出し得る。若し之に反抗する時は自然の爲に破られてしまふ。又人間が此の自然の法則を見破つて之を利用して自分等のために供する點に於ては確かに人間は自然より偉い。一秒間に地球の周圍を七回半廻る恐るべき自然の力も征服して之を無線電信電話として用ひる。

怖い雷さんもその正体を發見され今は電氣は世界文化の道具に供せられてゐる。

要するに人間は自然の法則を發見し之を利用する事に努むべきである。自然界の現象より推して自然の法則を發見せんとするのが科學又は哲學とか言ふものでないかと思ふ。

完——一九三二、八、二三

初 秋

藤 村 三 郎

青白い月の光が流れて来て目前の煙突の影を屋根に落して

ゐる。窓に腰かけて半身のり出してゐる私の影も、雨戸にうつゝゐる、呼吸をする度に胸の動きまでが見える。
あてどのない空想にやけを起して私は机の前を去つた。そしてこゝに來て冷い清らかな夜の氣を胸一杯に吸つた、鋭利な刃物の様な月の光と、草中に鳴くまづ虫の音と一緒に胸一杯に吸ひこんでやつた。

二

コンクリートの石段を下りる自分の足音もあまり大きすぎる。腐りかゝつた二枚板の橋だ。一人のればじわ／＼するその度ごとに水のない川原の石ころの上うつゝゐる。細長い影が動く、大きな流れ星が蒼白の空に圓弧をかけた。

三

何時も話したこともない友達と一緒に散歩した。道端の草にふれる素足に冷たい夜露がかゝつた。右手の竹藪の中でざわ／＼と氣味の悪い音がする。「ね！君。君の家はいゝ所にあるね秋の夜は虫の聲と、月光と、せゝらかな小川の流れが居ながらにして御馳走してもらへるよ」彼の聲はいやになつかしさうだ「ぢあ、いつでも來たまへ。家には何も無いが、僕の町には君にとつては無盡の御馳走がいつも調つてあるわけだからね」それ以來彼と私とは、前とはひきかへて仲

よくなつた。

僕は内心自慢の電氣スタントをもつてゐる。先づ氣に入つたのはその笠だ。外面は乳白色にくもつてゐて、甘いやはらかなさを殺風景な室内に投げてゐる。笠のふちの周圍には電氣記念の名残として「エヂソン」の名がうき出てゐる。蓋し私のエヂソン賞讚熱のしからしめた所で、この様な笠が手に入つたのであらう、値段は六拾錢。



文 苑

古城の秋

松 宮 實

詩の町、夢の町、城下町にも秋が訪づれた。

見るもの、聞くもの總べてが澄徹した——秋の空でなくては味ふことの出来ない或感じを抱かせる。
心ゆくまで澄みきつた空に、昔ながらの姿……昔ながらの装ひをして、儼然たる雄姿を顯はしてゐる。

唯黙々と……併し過去の夢。過去の事實を物語らうとしてゐる様な彦根城!! 路傍の一本の松の木、石垣までが何事かを我々に話しかけてゐる。それとなく吹く秋風に昔かはらぬさゝやきが、ひそかに耳の鼓膜に響いてくる。

嗚呼!! 古英雄の呼吸が、ときれ〜に聞える様だ。大小をかい挟んだ武士の姿が——ゆかしい濠の水に映つてゐる様だ。ロケーションに見る様な姿が。

鳶が二三羽悠々と輪を描きながら、城廓の近くにある松の木とすれ〜に、そして又明澄な空にくつきりと多がいいた様に實に悠々と飛び交つてゐる。

たゞぼんやりとそれを見つめてゐた。

折柄 ゴーン!! ゴーン!!

と長い、それは〜長い餘韻を残して山の鐘の音が、夢の町、詩の街、城下町に響きわたる。

何時しか太陽は傾いて、西の空は一面に朱を漂はした様に眼もまぶしい程だ。そして刻々に暮れの色が——黄昏の色があたりに垂れこめて来る。その中に薄黒く閉ぢこめられて行く天下の名城、それは今や静かな眠りに人らんとしてゐる。先程の鳶はもうかすかに、黒點の様にしか見えないうまでになつた。それでもなほ城の頭をかすめて無心に飛んでゐる。

年の甘い心地よき夢に酔はしめてくれる。縦ひ其れが華やかな町であらうとも、僻地の寒村であらうとも、そんな事は一向かまわない。故郷は全く我等の心の搖籃でなくてはならぬ。

私の故郷!! それは姉川の畔に位する平和な農村でありませぬ。雲程に巍然として崇高な英姿を横たへて居る膽吹山を眺める時、それに連想してきつと故郷が思ひ出されるのです。昔も今も變らないあの美しい姿よ!! そして私の心と故郷を清くあの英姿が結んでくれるのだ。紫翠の、又白皚々たる姿は私の網膜に焼きついて、私の慕郷の情を益々峻りたてるのです。私は何時も或一種の崇拜を以て、あの山を眺めるのです。暫し悄然として瞑想に耽つた事が幾度か。

然しふり願つて思ひめぐらす時、昔の詩人は云つた。「故郷は遠くにあつて思ふものだ。そして悲しく歌ふものだ。よしや落ちぶれて異土の乞食となり果てゝも、決して歸るべき所ではない。唯遠くにあつて故郷の夢を見るがよい」と。誠に然りである。故郷に歸つて折角圓らかな夢を破るよりも、美しい樂園を想像して心悲しく詩歌に託して哀情を遺るに勝つた事はあるまい。故郷よ!! 永劫に私を純な氣持であらしめてくれ。私は何時までもお前の搖籃にゆれて天國の夢を結び

嗚呼!! 僕は全く時の過ぎ行くのも知らなかつた。たゞぼんやりと濠端に佇んでゐる。いつまで佇ずんでゐるのだらう。

古城はもうねむつた。かすかに寢息が聞えて来る。

(日曜の午後) 一九三二、一〇、一一

故郷と私

田中正夫

何んとなく懐しい慕はしい。それは吾人皆共通な故郷に対する自然の情緒ではあるまいか。況して父の職務上幼時より故郷を後にして各地へ轉宅する家族としては、幼時の故郷が皆とはひとしほ深く胸に刻まれて、機會ある毎に淡い昔の幻を脳裡に描かしめるものです。

幼時の淡い記憶の縷々たる糸をたぐる時、少年時代の甘い追憶によつて如何なる境遇に居ようとも、私をほんとうに純な氣持に立ち還らしてくれる。楽しい幼年時代の思出は一切のわずらわしい思出をすつかり淨化して、何時迄も我等を幼

ながら、故郷の平和を護るであらう。 六、一〇、八

初秋の薄暮

木野戸勝逸

今まで栗の木の上に照り輝いて居た太陽は、スピードを増したのか最早向ふの屋根に没せんとして居る。時は初秋! 僕は涼風に吹かれて川原の堤に出て來た。何となくフレッシユな氣持になつた。僕はブラ〜と湖の方へ歩き出した。靜涼な微風をあびて、鈴虫が側の草の中でスマートな聲を出して自分の聲を自慢して居るかの様に鳴く。僕も負けずに元氣よく口笛を吹く。此處は全く別天地の様だ。鈴虫と僕の合唱はしばらく續く。然し鈴虫の聲は次第〜に後へ〜。突然けた〜ましく鳥の一軍が青空を鳴きつゝ飛んで行く。僕はしばしそれを見つめて居た。樂しそうに彼等は巢へ〜と。やがて僕は湖へ。あの廣々とし青々したる我が琵琶湖へ。波靜かにして音無く遠くに多景島・竹生島が夕日に映えて湖中にげん然と立つて居る。夕日は最早彼方西江湖の山に入没せん

として居る。夕焼だ、美しい夕焼だ。湖面に美しくキラ／＼輝く日の光。あゝ美麗なるかな、僕は見とれた。後を顧みると我が金龜城は夕日に照り輝き、薄桃色になつて居る。御伽話のお城の様だ。そこから立派に着飾つた王が美しい女王を連れて出て来さうだ。僕は恍惚としてこの雄大美麗な光景を見廻した。そして青空は次第に赤・灰・黒と色を變へて行く。最早太陽は山の背にその勇壯な姿を没した。ニコ／＼と微笑してサヨナラと言ふ如くに、廣い青い湖面も今や眠つたかざー・ゴーといびきをかき出した。本當に早く眠てしまふ。僕は未だあの勇大な光景を夢想して我家へ／＼、眞直な道を。既にあたりは暗のとばりにおくはれてしまつた。僕は高らかに勇壯な彦中應援歌を歌ひ出した。もうあの美しい光景はすぎた。又明日にと思ひつゝ歩を運ぶ。元氣に満ちて、あの壯大美麗なる初秋の薄暮かな、僕はその光景は忘れられない、永久に。

(終り)

時 雨

松 宮 實

快い日だ、あるかなきかの秋風が、すゞろに我等を無限の感慨境へと導く。
陽光を浴びながら楽しい野遊びに出かけた。
空は高く／＼晴れ上つて、ちつと見つめてみると自分はいつしか永遠の旅路にある様な感じがする。
行けども行けども唯蒼い空、それは仙境に遊ぶ様な想ひだ自由な、果てのない、しかも慈愛に溢れたこの大自然に僕は魅了せられてしまつてゐた。そして自分は今此の大自然に陶酔してゐる——と云ふよりは寧ろ此の自然の懐に抱かれてあまへてゐるのだ。水際の芝生に身体を横へて、無我の境に想ひを走せてゐる。苦痛もない、なやみもない。
水に映つた姿が何とも云へない程ゆかしいのだ。
ふと我にかへつた——その時、今までの快い陽光はいやや薄曇で濁つた様な雲に遮られてゐた。にくらしい雲——やがて音もなく降出した雨に今までの快樂は成算されてしまつた自分は餘儀なく歸途につかねばならなかつた。けれどやがて遙か向ふに雲の隙が現はれて来た。自分は思はず歡喜の聲を放つた。

然し、それは春だつた

古 川 傳 三 郎

ふところ手をして女中部屋の日當りのよい所にイすんで、竹藪を通して見へ隠れしつゝ昇り来る太陽の光をみつめてゐました。朝の清澄な空氣を感じながら私は何時迄も／＼兩手を懐につく込んだまゝ物思に耽つてゐた。黒黄のまばらな雞が、庭の石燈籠の寄でしきりに土を掘るのが妙に氣になり物思に沈みながらジツとそれを眺めてゐました。春の心地よい風が竹藪を揺がせて通り過ぎて行つた。

ジツと窓を通して外をみつめた。

遠く霞のかゝつた空に白雲がボツかりと浮いてゐた！ 春の日は高く昇つた。

机上のチューリップの一輪も！

窓外の紅椿の花も！

もう私の心の一輪をも邪して居ない。

私の此の体、全体、神經全部、感情の全部を奪つてゐるも

のは頭の中に霞んで寫つてゐる白線のキャップだつた。

ゲートルを巻いて學校へ行きたかつた！机にもたれて現境を想ふ時！それだけの勇氣が消失してゐるのを意識した。

私はふと雨の音に心付いて窓外を見た。

開けばなした窓を通して！

庭の椿の花も鮮やかにみなぎつてゐる緑の葉の中からピンク色を浮かしてゐた。

サツと霞めるやうに降つてゐる雨をジツと見てゐた。

絹の様な細い雨がしつとりと靜に降つてゐた。散つてしまつた櫻の枝に緑りの葉が萌し出してゐるのが妙に眼につく。しほれて頭をたれてゐるのが如何にもいじらしく想はれてならないのだ。

小雨の中に煙つてゐる彼方の小學校の姿が縁に輝いてゐる庭の彼方に薄くばやけて見へる。そこからは毎日／＼元氣よく歌を歌つてゐる子供達の聲がぼんやりとしてゐる私の胸に何か深く刻込んで行くのだ。

此のさびれたる景色を毎日／＼同じ様に此の病院の窓からみつめてゐるのだ。單調な風景だ。刺戟のないその日／＼だ刺戟がないと同じことを想ひ悩むのだ。私の心は此の春雨の

中に溶け込んで行きそろうだ。此のやつれし心をよけいにセン
チメンタルにしてしまふのだ。然しいゝ春雨だ。

何時迄も／＼私はこうやつて窓外をみつめてゐるんだ。私
は知らず／＼の間に春雨の彼方に煙か霞かに消へて行つた母
の姿を想出してゐたのだつた。

私の聲は將に息が絶へんとする人のもらす絶望の喘息のや
うに淋しく打ち震へた。

墓場を吹く風のやうに。

是の部屋中の静寂！ 悲しい絶望！

× ×

蛙がたつた一つ、何處かで淋しそうに泣いてゐるのがきこ
えて來た。

× ×

私は絶望と恐怖に涙をこぼした。

長い静な地にもぐり込みたい様な、それは悲しい涙だつた
罪人の持つ弱き涙だつた。否、純情な涙だ。

一九三一、五、一（病院の一室にて）

從姉の死

古川 傳 三 郎

世の中は恒に淋しい天の悪戯もかなしい、そして天からあ
たへられた運命と人生は恒に戦ふ。

生命を受けし人間は必ず死ぬ、俺もやがてはあの冷い墓と
なつてしまはなければならぬ。

一人の人間が死ぬ！ それは大したことでないだらうか、果
して？ 三十の坂を未だふまずに七つ頭に五人の子供を此の
世に残して死に逝くその姿の如何に淋しきことよ。

病院の一室！ 賑やかな空氣が溢満してゐる。あゝ窓外の
紅椿が一つ落ちた。

幼なくて母を失ひ今又姉と慕ひて愛して來たその人が今
手を合はした。闇！ 闇！ だん／＼目を閉じて行かれる。そ
の姿の如何におごそかなことよ。皆んな手を合した。

♪南無阿彌陀佛♪と自ら皆んなの唇からもれた。

太陽よ、草よ、木よ、土よ、人々よ、且て彼女を照し、彼
女を生かし、彼女を喜ばせた。彼女と共に生きて！ 御前達

はなんでもないので、一人の女が死ぬ！ それは太陽にとつ
て何だらう 生きてゐる人類にとつて何だらう。

悲しみに打ちまかされた一人の女のみが唯一人死んで行く
太陽よ、土よ、草よ、微風よ、御前達はあまりに冷い。

彼女は永久に逝つたのではないか。

× ×

窓に寄りかゝつて調和よく同じ様に回轉してゐる水車を凝
視してゐる間に、私の頭は、脳は、且て私が姉として尊敬し
愛されて慕つて來た從姉の面影で一杯だ。

御遺物なり、想出の寫真を取り出して二人で善く遊んだ幼
年時代を想出しては微笑ざるを得ない。

死んで逝く人の孤獨さがあはれでたまらなくなつて來た。

大自然の冷たさが背と胸にせまつて來るのであつた。

そしてわけもなく涙ぐましい心になつて來た。

北風が寒い、でも青い空は輝いてゐる、心は未だ冬だ。

早 春

若 林 正 三

野 球

芹川べりには冬の憂鬱から抜け出た若い蓬や蔭藪が見え出
した。
猫ぼんぼも銀ネツミ色を光らせて來た。
でも嫁菜は未だ早そうだ。
芹川端の往きがけ來がけ蔭藪の薄緑の春風が吹く。
西空に薄き茜色の棚引く晩方頃古寂びた軒三寸下りに小虫
が唸り乍らく／＼廻つてゐる。
あゝ何といふ素敵な唸りだらう。
この唸りには田舎情緒がたつぶり現はれてるではないか。

果 實 店

フレッシュな色彩！

芳烈な匂ひ！

果物屋は往き交ふ人を振り返らさなくてはおかぬ。

鏡の奥まで幾重にも重なり合つた果物——リンゴ・バナナ
ナシ等、幼き頃の驚異だつた。

若しそこに美しいシャンデリヤが輝いてゐたならば夢のお
國かと疑ふ位だつた。

明治神宮球場、或は甲子園にせよ野球競技は實に男子のスピリットとヴァイタリテイの誇である。あの焼けつく様な眞夏の陽光の下でまばゆきグラウンドの中に立つて熱球をとばし長棍を振ふ姿は眞にスピリットとヴァイタリテイそのものである。

ブレーボールを宣するアンパイアの聲に選手はひきしまりフワンは一時にどよめき緊張した空氣が場内に溢れる。或はレフト・オーバーの快打、火の出る様なフワイン・ブレイその熱狂的試合はいかなるファンも血がおどらざるを得ないだらう。

すゐみつ

北川 東海林郎

ぼつと桃色の染め潮す黄ばみの薄絹——
ふくらみ切つた頬と玉子色の肉体——豊かな曲線と熱てる唇——豊かさ、優しさ、麗しさ、此上ない彩をおぼめかし、鬱黄の精靈に、泉み匂ふ薫華が馨る。

を頼みてたちそむるに似たり。蔓稍々肥え葉愈々茂りてこの蔓、かの蔓に沿ひて、かの蔓この蔓を巻きて争ふが如く、競ふが如きは道にまどへるものを案内するさまあり。あるは登らむとするものゝ手をととりて引きあぐるさまなど、繪にも巧あるものをや。朝顔はその日その日に色かへて、おのがじしに染めなして、つとに起くる動をすゝむるに異ならず。しのゝめの空明け行く程に、露を含みたるが、そよ吹く風にもまられて露重げにおきあへず、ふりこぼせばこなたの朝顔のその露をうけて半も、もらさざる、すべて君臣あひいつくしみ、父子相ひ憐み、夫婦あひ睦び、兄弟あひたすけ、朋友相親しむに等し。人の世にあるも、この朝顔の如くその日その日を營みなば、盛りもいと永く久しからむと、まだきに起き出でしのゝめの曙をなぐさみぬ。

野 球

讀書の鬱を散じ、清新の氣を養ふは室外の遊技に如くはなく、遊技に種々あれども野球に如くなし。若しそれ日暖き春郊、氣清き秋野に出で「ボール」を追ひて東西に走り「バット」を揮ひて南北に馳せ、一離一合、奇術を試み、妙技を弄びなば心神は暢達し、体軀は強健なるに至り、その愉快なる

さて、わが愁傷な胸は、單とりとまりなき食氣ばかり……
——ひと夏の日光をたのしむ淨けき實、ひとつをかたくなほ欲してやまんとはせず。

あゝげにわが意思は悪鬼のやうなゆがみをみせ、遅緩さと飢渴におそろしく震へる腕は幾度か小刀をとりあぐ……然しわれは汝が聖なるめぐみにたより靜思と幽邃とを欣求する固定の表情に野武士のやうな荒い雙手は下し難い。思ひつゝ靜かに熱視する程に「ア、いゝ香ひがするよ……」と聞き慣れぬ聲のす。

あゝそは——汝には秘密の飢餓をわれより奪ひたる。

——悲しき豫言だ!! (完)

一九三一、八

朝顔の喩

北森 末吉

朝顔を植ゑたる日より芽さすを待つは、子を育つる親の心もかくやとばかり思ひ知らる。二葉より、いや葉生ひいでいと細かなる蔓の垣ほに取りつくさまは、いとけなき兒のもの

こといかばかりならぬ。突如生擒の險を冒し、疾驅して「ベイス」を掠奪せむとするとき、側面より攻撃せられこれを避けむとして再び前後突撃に會ひ、進退谷まりてしかも狼狽せず徐に熱球の間に立ちて再舉を圖るが如きは、攻術上の妙味なり。混雜なる規則の下に變化を自在にし、機を瞬間に制して開闔度にかなし、各部を整齊して全局の勝を期するが如きは、須らく以ておのれが智術を練磨すべし。戦今ややうやく乱れて奮闘各處に起り、熱球往來して爲す所を知らざる際、冷靜克くその條規に鑑み、おのれが方針を定むるが如きはこれに依りて以て果斷の氣を養ふべし。機を逸せずして疾風の如くに動作し、敵を衝いて奇功を收めむとするが如きは、これに依りて敏捷の動作に慣れ、勇氣を養ふべきなり。

去り行きし友

西島 輝夫

私は今城山の上に立つて一人考へに耽けつてゐる。
今を去る一月前、さうだつた。二學期の第一試験の前だつ

た。私と彼と且君とこゝで寝ころびながら教科書を読んでゐた。其の時彼は確か幾何をやつてゐたと思ふ。城山の木立の中で鳥が鳴いてゐた。彼はその鳥を鴨だと言つてゐた。それから又此處に在る此の橡栗の實を取つて彼と戦争ごつこしたあゝ、さうだつた。彼は戦争ごつこの最中に突然こんな事を言つた。「滿洲に於ては今實際此の様に戦かつて居て下さるのだねえ」と言ひながら、戦争ごつこを中止して「こゝは御國」の軍歌を大きな聲で歌ひ出した。勿論私も一緒に歌ひ出したものだつた。

又彼は小さな可愛い蛙が好きだつた。いつも學校の射撃場の處で蛙をつかんで後藤先生から教へて頂いた催眠術をかけて大事さうに持つてゐた。時としては帽子の中へ入れて被つて居る事さへあつた。それでゐて彼は又非常に優しい性質の持主だつた。それからそれから私の頭の中には彼の事が走馬燈の様に繞つて来る。

ごーんと城山の鐘が鳴つて木の葉がさみしく一葉散つた。

滿洲交代兵を送りて

進軍ラツパの音勇しく滿蒙利權擁護の爲派遣せらるゝ弘前の勇士を乗せた汽車は、プラットホームへ入つて來た。それ

を見た皆の者は思はず萬歳の聲を擧げた。此の汽車は當驛に

六分停車だ。其の間見送人數千の人が「こゝは御國」「橋中佐」「進軍」等の軍歌を歌つた。勿論兵隊さんがたも歌つた。あちらでも軍歌、こちらでも軍歌、あちらでも萬歳、こちらでも萬歳……私の前の女の人は泣いてゐる。おゝ此の時の涙……發車の汽笛は鳴つた。兵隊さん達は一しきり大きな聲を張り上げて歌つた。「戦ひ勝ちて歸へらば生きて歸らぬ我が身なり……」汽車は靜かに動いて行く。

前の女の人は顔も上げ得ないで泣いて居る。私も何んだか臉が熱くなつて來た。この泣きたい様な而して勇ましい其の他すべての感情を唯私は「萬歳」の二字に込めて大聲を張り上げてさげんだ。

「歡呼の聲に送られて今や出で立つ父母の國」と兵隊さんの歌ふ聲も漸次小さくなつて行く、汽車の後の赤い灯もだんだん小さくなつて行く。

× × ×

られてゐる所を見られた人は、すぐ自分がやつていなかつても、かく心を起さずにはいられないでしょう。

然し、それはまだ十分に野球の面白味を知らない人だと、

私は考へます。否きつとそうなのです。

もう半年以上もやつて居る者、又上達して居る者は練習の苦みもすぐ消えて面白味が起つて來ます。きつと!!

又自己の責任上からも……。

あの炎天下に於てコーチャーにしばらく居る時は、ほんとうに辛いです。何本もノックされ、つかみ得ないで氣ばかりあせり、身はうごかす事も出來ない程に苦しくなつて來て一寸した障害物にでもつまずけばすぐ倒れる程へト〜になる程しばらく居るのです。あの時の苦しさ、辛さと云ふものはほんとうに忘れられません。辛いです、苦しいです!!。然し此の苦しさと云ふ物は到底我等選手以外に於て味はゝれる事が出來ましようか? 出來ません。斷じて!!!

そこに野球の面白味や、又その野球の練習で此の尊い苦みによつて我等は自己をして何ものにも如何なる苦しみ否苦痛にもたへ得る様に鍛練せられてゆくのでは無いでしょうか? まだ我等選手には辛い冬季練習があります。

寒い北風がつめたく頬を撫でる頃、ユニホーム一枚での練

選手生活

西川 寛 一

夕日は西の山の彼方に落ち、薄暗き暮色が四方にたゞよふ頃、我等選手は土にまみれ、汗にぬれたユニホームで包んだ身の疲れをぬぐふ爲にベンチに横はるのが常であります。

かくて一日の練習を終へ楽しい我が家に急いで歸ります。

毎日大なる望をもつて我等は練習に勵むのです。雨の日も風の日も……如何なる日でも一生懸命に我が彦中校友會野球部の爲に……光輝ある歴史をけがさぬ様に……。

今や我が野球部は全く振つて居りません。それは皆我等の責任ぢやないでしょうか? 然りさうです。皆我等選手の大なる責任なのです」と我等選手は自覺して練習に勵んで居ります。練習!! 責任!! あゝ此の一言を思つた丈でも我等はすぐに「苦しい」との此の一言を頭に浮べます。

然し「いや」と云ふ様な考へは決して起りません。むしろ面白いと云ふ様な考へが起ります。

だが、まだ部へはいつたばかりの者、或は毎日我等がしほ

習です。その時のキヤツチボールの痛さ！手の平ははれあがり、果は青くなります。手にバットを握る事も出来得ない程に……でも我等はその苦痛をも突破します。何事も我慢して頑張るのです。我等は此の精神が十分に野球によつて與へられていと信じます。

然し、我等はかくの如くよい事ばかりではありません。或學期は成績も下る事もあります。然しこんな憂はずぐ晴れます。何故？我等には如何なる苦しみにも打勝つ事が出来る所の魂が養成されているから、すぐこの悪い成績を頑張つてとりかへず様に努力するからです。どんな「いや」と云ふ心が起つてもそのものに打勝ち勉強に努力します故……。

試合に於て一敗地にまみれ、涙と共に退場する時の悲しさは、此も又ほんとうに辛いです。然し我等はすぐ未來に活きます。何糞ッ！！次の試合に……次の試合をさして練習に勵むのです。

又戦に勝つた時のうれしさ！ほんとうに一生活れる事が出来ない感情です。然し自重して練習にのぞみます。

我等の望はもつと大なるものなのですから。では何か？この衰へた彦中野球部を昔の彦中野球部たらしめん事です。それはきつと選手の数と練習の懸命の問題なの

て、一日も早く凱旋して歸られる日を切に待つてゐる次第である。

日本は昔から一度も戦争に敗けたといふことはないのである。故に大君の爲、御國の爲といふ日本特有の日本魂をふるひ立て、國体の維持に努められんことを祈ります。

冬の城山に登つて

有川 幸久

第二學期の最後の試験も漸く終つた翌十二月二十日、日本の好い天氣に促されて、弟、友人等と城山に登つた。丁度午後一時であつた。

御野立所から北を望み、初雪の今だに遠くの山々を鵝毛の如く蔽つて居るのを見て「湖國にも冬が來たのだなあ」と思つた。一羽の鳶の聲が寒く冷く悲しく耳に入る。湖面鏡の如き第二港灣の彼方に點々と淋しく波紋を描く小舟は、多分魚を獲つて居るのであらう。又河口附近に幾個となく水に浸してある竹籠の様な物、其の間を通ふ水禽の様も如何にも冬ら

です。我等は樂しきスポーツマンだ!!!
頑張るのだ!!そして彦中野球部を再生するのだ!!

滿洲の野に活動する日本軍人を思ふ

長谷 晴男

あゝ勇敢なる日本軍人よ。
諸君は故郷に別れを告げて、はるくんと零下三十度の滿洲の平原に今活動して居られるのだ。

思へば今秋よりの日支衝突は、實に我が大日本帝國にとつては大事件である。支那軍隊の戦術が定まらぬから、これにあたる日本軍でも、正式な戦は出来ない。退くと約束しては又一方から攻めたり、白旗を揚げながら裏から襲つたり實に卑怯なやり方だ。こんな國を相手にしての戦は非常に困難であらう。九千萬の國民を代表して滿洲の原に寒さにおそはれ食糧さへ充分にあたらず日夜死力を盡して奮闘して居て下さる日本軍人には心から感謝してゐる。

忠勇なる君達の心にやどる日本魂で卑怯な支那を攻め平げ

しい。第一學期野外教練に來た時、河の中に落ち込んだ人を助けたのもあの附近だつたと思ひ出された。時に午後二時、鐘の音が寒風に紛れて何處にか消えて行くと、專賣局のサイレンの音に驚いて飛び起つた鴉の玄宮園の池の面に映す影は家鴨の進むにつれて伸び縮みするのも面白い。

眼は東に移つた。先づ目に着いたのは赤い屋根の彦根驛で煙や蒸氣を濛々と吐きつゝ通過したのは多分燕であらう。伊吹風の身に沁むにつけて、滿洲の寒さはどんなであらうと想像して居ると、弟や友人が「寒いから歸らう」と言ふので、仕方なく下り、歸途樂々園を通り抜け陳列館の裏の邊で殊に寒いやうな所で皆の者と元氣よく遊んだ。雀の群が寒さうに櫻の並木に留り、如何にも他の雀どもに「寒いなあ」と言ふ口振で居ると、午後三時の鐘が鳴つたので、皆の者と家へ急いだ。

寒かつたが、清々しい景色を見て、心身共に非常に爽快になつた。

夜明け

上林久一郎

何かしら僕は今日は早く目が覺めた。何處かで鶏が鳴いて居る。多分一番鶏だらう。その鶏が鳴き止むとあたりは復しん／＼と静まり返つて居る。僕は此の静かな時に勉強しておかうと思つて静かにそつと皆がねむつて居るのを覺さぬやうに床を起きた。此んなに早く起きた事は初めてだ。起るとすぐ「あゝさむ」とひとり語が出た。本當に寒い、僕は急いで羽織を取りに行つた。窓をのぞいて見ると、外はまだ大分くらう。遠くの方で汽車の汽笛がボーと聞えた。一番汽車位だらう。羽織を着て僕の勉強部屋に入つた。方々を手さぐりに歩いてやつと電燈を取つた。素早くスウィッチを振ると、今しがたまで眞黒で有つた部屋が、パツと瞬間にあかるくなる暗闇から急にあかるく成つたのでまばゆい。本棚やたんす等が大きなかけを大きくうしろの壁にうつして居る。僕は國語を出して次の課の漢字語句等をしらべ始めた。たゞ一人でじやまする者も無く、又晝間の様に外の騒々しさも耳に入らず

面白い程に勉強が出来る、三、四〇分もたつた時分に村のお寺の鐘がなり始めた、内の鶏も又鳴き始めた遠くで汽船の汽笛も聞え大分外も騒々しく成りかけて来た。僕はもう國語を止めて英語をしようと思ひそつと國語の本とノート等を片づけ英譯の本を出した。僕の勉強する部屋は土蔵だ。机のすぐ前が大きな窓で白いカーテンを掛けておく外は庭だ。土蔵で有るから澤山の道具がしまつて有る。よく鼠がた／＼と音を立てる、少し恐しいと思へばすぐ講談や雜誌等で讀んだ火の玉や幽霊の物凄いや有様が目にうかぶ。戦慄が脊すじをさつと走り身体中がさむくふるへる、と其の時臺所の方で大きな音がした。ハツとしてびつくりして居るとお母さんの聲で僕を呼ばれたのでやつとお母さんがおきてこられたのだと分かつた。それから心を落ちつかして又英譯をやり始めた、英譯を終り本を片づけてしまつて立つて臺所の方へ行くともう戸もあけはなたれて外も明かるい、棚から齒ブラシに粉をつけて齒をみがきながら外へ出た。大變つめたい。鶏をだしてやつた。まぢかねた様に光に向つてとび出して行く雄がココ、と鳴きながら雌をつれて行く。僕は齒をみがきながら田甫を散歩した、間もなく東の山から大きな赤い朝日が神々しく美しく輝やきながら揚つて来た。

派遣兵見送り

居長賢藏

夕日は西に沈んで黄昏時となつた。父と共に驛へ着いた。「澤山の人だなあ！」と父は言つた青年國も處女會も商業學校や女學校の生徒も各々群をなして驛前の廣場に集つてゐる、滿洲派遣兵の見送りなのだ。小學生は日の丸の旗をもつて飛び廻つてゐる。

僕は父に従つて待合室に入つた。まだ三十分もあるといふので椅子に腰をかけてぼんやりとしてゐた。益々人が多くなつた。一年生も數人來たので何やらつまらぬ話をしてゐる中に大分氣が糾れた。

突然！ゴーツと音がした。場内は忽靜かになつた、と、瞬間眞黒な巨体が突入して來た、向ふで「萬歳」の叫び聲が起つた僕も思はず「萬歳」と叫んだ。然しその萬歳こそは實に日本國民の忠情の一端であらう。兵士は聲がかれてゐた。そして「萬歳々々」と叫び續けてゐる。あの鐵腕！黒き瞳！ひきしまつた口！流石に日本軍人だ、日本の威力だ。そしてその

光景を外國人に見せてやりたかつた。

數分間停車した、プラットホームは人の往來がはげしい。

僕は兵士を見つめた、そして一命を天子に捧げて我等日本國民の爲に、滿蒙の寒氣を征服して活躍する兵士の心の中をしのんで、つく／＼感謝せずにはおられなかつた、そして兵士の無事なることを祈つた。

やがて發車の音！おゝさらば！場内は再び靜かになつた忽ち萬歳の叫び！汽車は靜かにきしり出した。後の方に父の聲も雜つてゐた。

初秋の午後

二學期も始つて間もない或る日曜日午後、陽は和く照つて、透りは全く秋の氣分を湛へてゐた。怠屈まぎれに僕は家を出た、そして八幡神社の裏の森の方へブラ／＼と歩いて行つた。

僕は御堂の裏をぬけて森に出た、森は森閑として日光がチラ／＼と洩れてゐた、時々涼風がそよ／＼と吹いて來て大變

好い氣持である、此の森の中を一抹の清水が流れてゐる、そしてその音は丁度月夜に鳴くこぼろぎの如く聞えた。

僕は何氣なく側のベンチに腰を下した、そしてぼんやりと邊を見廻した。

邊は人聲もなく静かである。時々小鳥がけたましく鳴いた、然し何と云ふ小鳥だか解らない、唯「いゝ聲だなあ！」と歎ずるのみであつた、又鳥が長閑さうに「カーカー」と飛んで行つた、遠方に鳴く蟬の聲も微かに哀れに聞えたやがて其等の物音は絶へて暫らくの沈黙が続けられた。

楓樹の葉はもう紅葉しかけてゐる。ポブラの葉も黄色になつて風の吹く度に「ハラ〜」と二三散つた、そして風にさそわれて舞ひつき、踊りつき、遠方の方へ姿を消すものもあつた。時々松と杉とがすれ合つてさわ〜と何物をか囁いてゐた。

やがて風が止んだ、清水の音も、小鳥の音楽も、松と杉との會話も皆静かになつた、そして僕は無人島に一人ぼつちにせられたやうに——全くロビンソン、クルーリーのやうな氣持がした、そして又何處にか神秘が潜んでゐるやうに思はれた——

夕陽が赤々と西に沈みかけた、その夕陽が僕を照した時、

る。

ふら〜と夢路をたどるやうな氣持で家へ着いた時、その宣傳をおどろかすにはいられなかつた。

そしてどこもかしこも賑やかに明るくゑびす講の初日は暮れていつた。

盛なりし我村を思ふ

種村 貞一

時は推古その昔聖徳太子が清涼の山の麓に清涼山敏滿寺を草創なされてから、一百有餘堂の寺々立並び朱塗りの柱、銅瓦、純白の壁、背景の緑山を背にしその美しさ人の目をうばひ、しばしの間人をして此の域を去るをさまたげさせたであらう。朝に鳴り出す寺々の鐘は天上天下に響き渡り讀經の聲は四隣を壓し、山にこだまし、谷にひびき渡り、又夕に響き渡る鐘の音は靜かに、おごそかに、高く、底く極樂の世界迄も響き渡つたであらう。けれども此の平和な里にもやがて來る衰がせまつてゐた。

僕は眼に見えぬ偉大なものを言語に盡せぬ壯嚴さを感じた。

ゑびす講大賣出し

上田 良平

ゑびす講大賣出しに買物にいつて見てまづ僕の感じたことはその各商店の宣傳だ。

晩秋のすみわたつた大空に無數にひるがへる「大安賣、當店必死の大勉強、メチャ〜投賣」等の廣告旗、赤地に白く「上阪屋呉服店へ、松井雜貨店へ」とそめぬいた大きな幟で路はトンネルだ、無盡藏な色とりどりのビラ、水上飛行機のビラまき「安いぞ〜〜」何でも十錢〜〜の聲も賑やかにいりみだれてラジオ屋、音楽屋の店先からは人の心をうき〜させるやうな音楽が踊つてゐる。

ゑびす講の夜が來た、光!! 光の海 光の交錯、魅力ある近藤呉服店のイルミネーション、各商店の電氣文字、大看板色電球、露店商人特殊のガスランプ、鈴蘭燈。

人人黒山の人、本當に大都會の複雑さを思はずに十分であ

永祿五年九月淺井長政久徳攻の時、彼と通ぜし我が村の寺を城陥落後に、我等が里へと攻め寄せ放火し寺々を焼き拂はしめたので火は炎炎と天をこがし華麗をほこつた敏滿寺も一朝にして焼野原と化し僧徒皆敗死したのであつた。歴史開けて千有餘年の古利も淺茅原の露と化し、今を盛りの清涼の山紅葉は、血しほの色にした〜つて夢の最後を吊つてゐた事であらう。榮古盛衰は世のならひだ!!けれどもあまりむごたらしい最後よ!! 同情しないもの果して何人かある? 世はうつり流れること幾星霜今や焼野原は綠衣を着て叢林や桑畑と化し昔の風景消えうせたる様は、國破山河在、城春草木深の句にも似たり、松籟天風千變萬化して勇士の最後を吊つてゐるそこで十月四日にはこの勇士に對して讀經をさ〜げ勇士の魂を吊つてゐる。

當時の名残の古池や、二三焼け残りの佛殿や、古佛、古像等も掘り出され昔を物語るよすがとなつてゐる。今にして思へば唯一場の夢だ!!その夢が私をしてこよなく村を思慕させるのである。

感謝

庵野 太久馬

満天の星輝き息吹は眞白になつて目の前に現はれる曉の風冷たく肌をさす、時は来た國民の希望を双肩に荷うて遠く滿洲に派遣される弘前師團の勇士を乗せた列車は威勢よくブラツドホームに入つて来た、萬歳。萬歳。萬歳の聲、我々は勇士を迎へる爲に目を皿のやうにしてゐた。

兵士はとても元氣だ。大和魂の日本男子だ！、我等はまだ一度も見なかった人だがなんだかなつかしかつた。我々は熱意をこめて握手した。互の正義に満ちた愛國心を掌から掌に交流させながら

突然汽笛は鳴つたと共に列車は動き出し我々を後にのこして進んで行つた、勇士の別れ！、「萬歳々々……」の熱叫はだん／＼遠くなり勇しい門出を祝ふ軍歌のみがいつまでも歌はれてゐた。暫くしてはつと氣づくとはしんとして驛の電燈が青くさびしく照つてゐた。

僕は唯一人ぼんやりと待合室の柱にもたれてゐた。

雪に埋れた滿洲の生命線に働く派遣軍のことを思ひうかべ僕の小さき胸は勇士に對する感謝と戦死者に對する同情の心で一ぱいになつてゐた、そして紅い夕陽の滿洲で働く勇士に多幸あれと泪ぐましい氣持になつて祈つた。

父

前田 多喜男

今私の頭の中は故郷で病み臥す父の悄然とした顔で埋まつてゐます。淋しさうな顔です。そして先週の日曜日に歸つて父に面會した時まなこを潤ましてたゞうなづいた顔なのです。「あゝお父さん」翼持つ自由の身なら直ぐ様飛んで行つて、あの淋しさうな顔を笑はせたいに……、此の悲しい私の心を一層暗くさすものは先日の醫師の宣告で「もうお諦めにならなければいけません」なんて事になつたんでしょう。なんて運命つ奴は皮肉なんですよ。私の父を奪はんとする死こそ私にとつてどんな惡魔だつてこれ程惡魔はありません。私達の如何なる努力をもふり拂つて死は悄然たる父の枕頭に迫

るでしやふか？。もしさうだつたら、もし私から永久に去る時が來たら私は悲しみに溺れなければなりません。「神様今暫く父の命を……」と念じる此の小さき胸に自然に映じる大きな顔、其の淋しい顔は活動のスクリンの上に描かれたやうに白く力がないのです。そして懐さうに頻りに何か話してゐる様です。其の影が胸から去つた時私のまぶたは熱くなつてゐました。ほてつた頬を冷い涙がとどめなくつたつて行くのがたまらないのです。思ひ返せば頑はない六の春に慈愛深い手に新しい帽子を下さつた。あの時の有頂點の喜び。白い褥は自然に融け、今まで壓迫されてゐたかよはき草木は緑に茂り道は水に濡ひ春陽を受けて梅も桃も櫻も笑つてゐたあの八才の四月私達も若草の如き潑刺たる生の力を持つて小學校の門をくゞつたのも父の熱ぼい手に握られてゐたのでした。私は小學校が明るい楽しい所でした。そして家庭の懐しさたらありません。算術に國語に習字に貰つて歸る「まる」を見て喜び勵まして下さつた幾年か前の父の顔。春に夏に秋に冬にすべてが父と私との大繪巻物です。とりわけ物靜かに降り頼る雪の夜爐を圍んで偉人教訓物語は爐の温みと共に私の骨髓に浸みこんで行きました。私の眼は燃へ息苦し程緊張した冬の燈下こそ私の生を終るまでの想出になりましやふ、西郷

宵の町

南州先生の如き氣質を備へた父、私は今まで否將來も崇敬すべき所なのです。頭に胸に体中に父の姿が浮ぶ時、私はたゞ悲しいだけでなく、力なき唇の動きは何か知ら私に偉大なる力と呼び叫んでゐるやふに暗示してゐます。さうです私は父と別れるのは悲しいです。併し私には新しい決心を授けて戴いたのです。「お父さん悲しい〜お別れは程なく來るでしやう。而し私の事は御安心下さい。私はお父さんの期待にそむかずきつと強く正しく生きますから」せめてもの父へ彦根の空から毎日祈る私の祈です。

冷えきつた雪や氷の上を通つて來たやうな寒風は金龜城下を行きつもどりつしてゐる。今暮れようとす城下町は靜かな黒雲に蔽はれてゐる。唯西の空だけが僅に董色にぼかされて、淡い氣流が金龜城を抱み黒みかゝつた松の中にねぐらに歸つた鴉の親子が嬉しさうにはたきしてゐる。と突然六時の時報鐘が夕闇の中を波紋を描きながら町々に傳はつて行く

詩藻

遊天之川

大和田清期

漢河灣屬坂田郡世繼里去米原驛少里許
以鱗魚有名兩岸有老松數百株蟠龍橫白
砂翠綠覆天雖盛夏尙忘暑遠眺比良加能
之連峰於煙波渺茫間近望多景竹生之靈
嶋於指顧中風光絕佳非湖西舞子之比惜
哉地僻而人知稀稍聞處々設小亭應需獲
鱗魚饗之美味堪賞矣晚春與友遊冒雨于
茲盡日而還得數首

其一

不識洞厨勝此湖 青松煙雨似仙區
漁舟恰棹前汀去 好獲香魚供客厨

其二

翠靄模糊鎖遠灣 曲汀松老雨痕斑
霓裳不到君休憾 怕使仙童作俗寰

其三

うづだかき塚の上なる
石の塔あはれ苔蒸す

松の木は高く聳えて
木枯に何かさゝやく
その聲は静かにねむる
英傑のうめきの聲か
はかなくも哀れ答ふる
者もなし嗚呼世は無情

晩秋の薄墨色の
空に舞ふ鳶の姿の
悲しくも囀る唄も
亦哀れ舞ひてうたひて
疲れしか翼を閉ぢて
音もなく静かにとまる

松の枝重げに垂れて
木枯はなほも唸りて
樹々の葉は名残惜しげに

「あゝたう／＼今日は暮れたなあ——」一種悲しい氣持が胸をさす。而し明日あるの觀念は此の暗闇に沈まうとする吾が心を甦生させた。「おゝさうだ明日があるのだ」私の心は暗に光明を得た如く嬉しかった。そして此の間學んだ徳富先生の文を思ひ出して口中で云つてみた。「我を無極に繋ぐものは明日なり。十年も百年も千年も萬年も一億萬年も千億萬年も總べて明日の積なるを知らずや。人生蜉蝣の如し。但し明日の觀念は人に永遠の生命を與ふ。我をして待つあるの宏懷を有せしむ」實にさうだあの元氣漲ぎる明日の太陽は吾を理想郷に導いて來れるのだ。希望が明日によつて熱と力を加へられるのだ。そんな事を考へてゐる中に大手橋を過ぎてゐた。そしてポケットから手を出して手袋を脱ぎ木枯の夕風にふれてみた。あまりの冷たさに五指が一本一本膨れて行くやうだ。今度は頬に手をやつた。其の時手を走る血液が頬にづつと傳はつて行く様で微かにふるへてゐた。古風な町を歩きながら

× × ×

一路長汀雨若煙 漁舟過處乱漪漣
任他綠渚青松畔 脫却塵寰作酒仙

其四

危亭臨水覺微寒 細雨包江寂釣灘
恰好主人調味巧 佳肴美酒溢杯盤

供 花澤航空少佐之靈

少佐令兄治策氏與予奉

干連卓職於當校以故有

感更深者謹賦云

鳥器翔天潰賊叢 東西中外仰雄風
以思魂魄豈空死 永作神靈護滿蒙

(詩)

木 枯

松 宮 實

吹き荒ぶ木枯寒き
野に獨り立ちてさびしく
見わたせば悲しくなりて
うるむ目に浮ぶは何ぞ

ひらひらと地上に落ちて
悲しげにふるさと淋し
梢には木枯寒く

吹き荒ぶ野に立つ我れも
悲しくてひとり淋しく
我が家路静かにたどる

電燈は二つ三つ四つ
あちこちに淡く光りて

田甫道後へ後へと進み行く

淋しくなつたから……

小さなお舟 (童謡)

名 畑 惣 次

横の小川の流にそうて

小さなお舟が流れ行く

くさにとまつてた小さな蛙

小舟のつて流れてる

あ ひ る

お池の面にういてゐる

水にしめつたあひるの羽は

お花ぐもりのお日様に

今日もダイヤにひかつてる

順 禮

夕日が山へ沈むころ

たつた一人の順禮が

村の辻道地藏の前で

ほそいお杖と休んでた

僕 の 妹

いつもよくねる妹が

今日に限つてねないので

勉強すんで覗いたら

すやすや夢路におちていた

雨

雨よふれふれ

もつともつとふうれ

おしりまくつてかささして

ぐるぐるまわつてとんで行こ

雨よふれふれもつともつとふうれ

飛行機

飛行機がとんできた

くるりくるりとちゆがへり

烏びつくり黒い顔

悲しき回想

北川 東海林 郎

どうして神様は母様をむりやりに墓の中へ

あゝ私を引き寄せせるのか？

私は寂しい夜を幸福に送つて居た

母様を一人たよる私ではなかつたか？

×

私はまだほんの子供であつた時

あなたはよく昔の英雄談をして下さいましたね——

幾度それをねだつたことでしょう

夫して夫れを幸福の中に聞いていたのに

×

さうだのに私一人を捨てておいて

母様は逝つてしまつた

母様はたのしい、天国で父様に會へるから

私は淋しい、地上に一人で

×

私はうとうとと眠入る

夫して母様のおられた時代の夢を見る

あの氣高き姿は愛に満ちた姿と共にまざまざと

胸の底から浮んでくる

×

母様を光り輝く骨牌臺に据ゑたのは

此の私ではなかつたらうか？

多くの人人は私になぐさめの言葉を言つた

それであきらめるのが人間なのか？

多くの喜びや多くの悲しみや
多くの心配の群れ騒ぐ中で
私は亡き母様をしたふ
夫して過去も未来も

—完—
一九三二、八、九

病床の思ひ

近藤國藏

月

若林正三

蒼白い
薄ぼい
月は冴えてゐる
なつかしい
たつた一人の友だちと
別れた日も
やつぱり月は冴えてゐた

入院してより十数日
毎日私は無聊を味つた
初めて味ふ此のつらさは
私にはたまらなく悲しかった
又淋しかった

徒然なるまゝに手にした本を
私は側に静かに下した
夕闇は音もなく近づいて
静寂は周囲を取り巻いてゐた
私の心は淋しかった
青春の、尊き一日を
今日も亦病床に
空しく過したかと思つた時

初夏

若林正三

尙後幾日もかと思つた時
私はたまらなく残念だつた
晝間は何物かにより
なぐさめられてゐた心は
夜の來るを嫌がつた
側に付き添ひの伯母をれど
淋びしさは心を襲うた

初夏！
なんといふ懐しい時だらう
樹といふ樹はみんな緑
新鮮なみどりの葉は
なつかしい耳に囁く

其の様な時私は
必ず眼をとぢた、冥想した
懐しき故郷を思ひ浮べて
父母の姿、弟の顔に
吾が心は走つて行つた

初夏！
なんといふ愉快な時だらう
吹く風もすべてみどり
緑の林で鳥がさへづつてゐる
緑の風が耳に囁く

近くの寺の讀經の鐘に
冥想より我に返つた時
淋しさは再び私をおそうた
健康體の尊さを
私はしみしみ味つた

こころ

竹内一

DRY・ICEは

冷たいものだと言いた

彼のところは

冷たいのだといふ噂

どらい、あいつは

熱すれば、ガスになる

彼の心に

情熱が燃えるとき？

それは彼の白骨を残して

彼の肉体が——(墓場の煙突から)
けむりとなつて上るときか

友 情

この足は さようなら

別れねばならぬ けれど——

この手は 握手

離しても まだ——

眼と眼は放電

ここるところは 永久磁石

湖 上

汽車は出る出る

東へ北へ

私や南へ のう鴉

×

南くもれば

伊吹は雨ぢや

何で泣かうぞ のう鴉

×

湖をなでなで

吹きくる風が

何で寒かる のう鴉

——米原驛附近は鴉影し——

◇ ◇ ◇

埃 及

小 林 弘

木の伊ねむるピラミッドは太古の夢を物語るか——。

星空に輝く。

若さに香る椰子の葉蔭に異形のスフィンクスが——。

默念として座す。

洋々として逝いて復かへらぬナイルの流。

六千年の昔も今も——。

ゆたかに潤ふ三角洲のほとり紅蕃薇は咲き乱る。

人類神秘の國——埃及!!

どこまで沿ふてる

白い道!!

棕櫚の並木の

散歩道!!

南歐のローマンス

忍ばせて

夢の國へか

並木道!!

落 日

ブレイリー!! ある草原——

私は夕を思ふ ブレイリーの

日路はるかに 地平線上に

沈みゆく太陽 茜に燃えつゝ

喜悅も悲哀も噫!

水草を追ふて さすらふ

自然の子!!

道

紺碧の海に沿ふ道

並木道!!